

# 新疆ウイグル自治区における牧畜業

武万爾・哈里

(中国新疆八一農学院農業経済学)

新疆は中国の重要な牧畜地域の一つであり、新疆牧畜生産の歴史も長い。それに新疆に住んでいる各民族が牧畜業を経営する伝統的習慣がある。新疆の草原が広く、牧草の質が良いので、牧畜業を発展させるのに独特の良い条件を有している。牧畜業は新疆の国民経済の中でとても重要な地位を占めるので、有史以来我が区の民族経済の主な柱となっている。私は本文において、新疆牧畜業の解放前の歴史、解放後の改革と発展過程及び実際の状況についてすべてお話ししたが、本文を通じて新疆牧畜業経済の基本状況を理解してほしい。

## 1. 解放前の新疆牧畜業の歴史

新疆は中国の二番目の牧畜地域であり、新疆牧畜生産の歴史も長い。新疆には牧畜生産をいとなむ民族は比較的多い。主にカザフ、モンゴル、キルクス、タジクと言った民族である。ウイグル民族を主とした各民族は、南新疆と東新疆および北新疆において、主に農業を経営するけれども、牧畜業を兼営する歴史的伝統を持っている。歴史の記録に記載されたように、何千年以来、新疆のウルムチ、ハミの七角井、羅布泊、且末と言った所に、人々は漁、猪または遊牧活動をいとなんできた。崑崙山脈、天山山脈、アルタイ山脈および天山の北側の広い地域における各民族と部族は数多くの小さい国を作っていた。それらの大部分が遊牧生活をしてきた。したがって、彼らを“逐水草而居”と言う。“行国”と歴史の書物に書いてある。天山の南側の広い地域にも多くの部族が小さな国をいく

つも作っていた。彼らは主に農業を経営していても、牧畜業を兼営していた。

カザフ族は新疆の牧畜業生産をいとなむ主な民族の一つである。カザフ族は古代中部アジアの草原にあった数多くの部族と融合され形成している民族である。彼らの多くは古代ウソン人と6世紀に振興したトルク人などである。解放前に新疆のカザフ族は今のイリカザフ自治州、昌吉回族自治州の各県、ウルムチ市、ハミ地区の各県と言った天山の北側のいたる所に分布していた。

モンゴル族も新疆では牧畜生産をいとなむ主な民族の一つである。12世紀から13世紀にかけて、モンゴル族はクルムブ川と嫩江川流域の草原に住んでいて、遊牧生活をしてきた。1227年ジンギスカンの三男ウガタは中国を統一し、元と言う国を作った。元の皇帝ウガタは新疆または中部アジアに四つの汗国を作った。新疆の天山の北はウガタ汗国に属して、南はチャガダイ汗国と呼ばれた。1368年、元が退いてから、新疆にも依然として、数多くのモンゴル部族がいて、オイラート四部と呼ばれていた。オイラート四部はジャンガル、ドルブト、トルグト、ホシュートなどの部族を指していた。ジュンガルモンゴルはイリ川流域に、ドルブトモンゴルはエルチス川流域に、トルグトモンゴルはタルバガタイ地域に、ホシュートモンゴルはウルムチと焉耆地域に遊牧していた。17世紀の後半、ジュンガルモンゴルは強くなって、オイラートモンゴルの柱となった。そして各モンゴル部族を統一した。しかし、トルグトモンゴルはウォル

ガ川の手前の草原に追い出され、ホシュートモンゴルは青海草原に追い出された。新疆地区にジュンガルモンゴル以外は、主にドルブトモンゴルがのこされた。1771年、ウォルガ川流域に居住していたトルグトモンゴルは当時のロシアのツァーリ皇帝の圧力にたえなくて、オハミの意思によって、新疆にかえって来た。当時清の政府は彼らを新疆の和精県の草原、ボルタラ、ホブクサルなどの所に遊牧をさせた。モンゴル族は天然草原を利用して放牧をするので、長い間の遊牧生活の中で豊富な家畜経営経験を集めた。天山の南には農業が発展していたので、そこに遊牧していたモンゴル族も昔から農業を兼営していた。天山の北にいるモンゴル族は、漢民族、カイ民族、ウイグル族などの民族の影響を受けて、近ごろは農業を営んでいる。しかしその比率はとても低い。解放前には、新疆のモンゴル族の居住していた所は今のバインゴロンモンゴル自治州、ボルタラモンゴル自治州、ホブクサルモンゴル自治県であって、“逐水草而居”と言う遊牧生活をくらして来た。

新疆のキルクス民族は牧畜業を営むとともに農業を兼営する民族である。古代キルクス人（約公元前）の先祖はシボリヤに住んでいた。6世紀の前後、一部分のキルクス人は新疆の北部に移って来た。6世紀から7世紀にかけて、キルクス人は次第に天山あたりに移って来た。当地の住民とまぜられ、近代のキルクス民族となった。約17世紀からはじめて、天山中部の一部分のキルクス族は新疆の西部にあるパミール高原に移って来ている。ロシアのツァーリ皇帝が中部アジアを支配していた時代、一部分のキルクス人が中部アジアからぞくぞくと新疆に移ってきた。彼らの多くは山地草原に居住していて、牧畜業をいとなんでいる。解放前、新疆のキルクス族が特に集中していた所は今のキズロ

スーキルクス自治州であり、北新疆のテクス、昭蘇、オミと言った県にも少数のキルクス人がちらばっている。したがって、キルクス族が牧畜業を営んだ歴史もみじかくない。

タジク民族も新疆において主な牧畜業をいとなむ民族である。タジク族の先祖は公元前後において、漢の時代から遊牧生活をくらしていた。当時は彼らの部族は“蒲犁国”と呼ばれていた。漢との交流もとても密接にあった。6世紀ごろ、彼らは“羯槃陀人”と呼んでいた。彼らの地域には、牧草が豊富で、生活もゆたかであったため、まわりの部族である回鶻人、中部アジア南部の坎巨提人、舒格南人、浩罕人、瓦罕人、などがこの地域に侵略してきた。これらの外来の各部族が当時のタジク族と長い間一緒にくらしていた。その後キルクス人やウイグル人とまぜられ、次第に今のタジク民族が形成された。解放前、タジク族の居住していた所は今のタシコルガンタジク自治県であって、主に牧畜業を営んで来た。

以上に述べた四つの民族以外の民族も解放前に、主に農業をいとなんでいたけれども、その多くは牧畜業を兼営していた。例えば、タタル族、ウズベク族の大部分が牧畜業を営んでいた。ウイグル族も依然牧畜業を営んでいたが、その後、彼らは天山南路の東西交通網に住んでいて、外来の経済、文化の影響を受けて、そのうえ自然条件も良くて、水や土地などの資源も豊富であったため、次第に半定居住に変わって、農業生産が始まった。最後に、経済の発展につれて、彼らは最終的に定住して、農業生産を主に、牧畜業を兼営する民族となった。18世紀の中ごろ、清の政府はジュンガル動乱を鎮圧し、天山南北に支配を強めた。それから天山南路にあるウイグル民族を天山北路にあるイリと昌吉あたりに移させて屯田させた。したがって、ウ

イグル族の農業を経営する領域も一步と拡大された。別の少数民族は各自の生産方式あるいは生活方式がそれぞれ違うけれども、歴史的に牧畜経済に対して密接に関係している。

上述の各民族は、長い時期に渡って、牧畜業を経営していたあるいは兼営していたけれども、解放前の何世紀もの間戦争が続き、政治情況が不安定のため、牧畜業自体も別の経済部門と同じように発展が遅かった。清の政府は18世紀の中ごろ、天山北路のジュンガル勢力をおさえ、また天山南路の大小和卓木の動乱をおさえた。こうして、新疆を統一し、屯田と牧畜業の発展に力を尽くす政策をとって、新疆の牧畜業の発展速度を回復させた。しかし、清の政府の支配が衰えていくにつれて、新疆の牧畜業の発展が間もなく停滞状態に落ちてきた。20世紀の30年代から40年代にかけて、牧畜業の発展が回復されたが、国民党の新疆に対する支配によって、新疆の各経済部門の発展も全面的に後退されてきた。牧畜業も言うまでもない。とにかく、解放前における新疆牧畜業の歴史的発展状態が波の状態にあった。その原因は以下のものであった。

(1) 奴隷制度あるいは封建制度の生産関係によって、牧畜生産力の発展が阻害された。解放前、新疆地区において、奴隷制度の残りが嚴重であって、封建制度のそれも非常に濃厚であった。これらの制度が社会経済の中で消極的であった。それは搾取が残酷であり、社会的生産方式は極めて古くて、保守的で、改革と進歩に排他的であった。奴隷制度において、地主が基本的生産資料を所有し、農民は土地ではたらくだけで、1年中農民の生活に変わりはない。このような後進的な生産関係が労働者の生産積極性をおさえ、牧畜業生産の発展も阻害されていた。

(2) 生産力の水準が低くて、生産道具が後進的であった。秦と漢の時代からの2000年以来、中国の社会制度は長期的に封建主義段階に停滞していた。時代がぞくぞくと変わっていても、社会制度あるいは経済基礎が変わらないので、最終的に後進的な自然経済状態を変らせることができなかった。近代において中国の社会が半封建半植民地と論じられてから、帝国主義と封建主義の二重圧迫におかれ、社会経済も困難な状態に落ちて来た。したがって、新疆の社会経済は基本的に全国のそれによって左右され、同時に全国と比べれば、もっと原始的で、後進的であった。新疆の牧畜生産は昔から人にたよって、人の手で作られた道具にたよって行なわれてきた。労働者は長期に渡って集めた生産経験によって放牧をすることになっていて、生産を進展させる積極性がなければ、生産道具を改善させる技術もなかった。したがって、牧畜業の生産は低級段階の循環の中で行なわれるしかないので、自然経済状態が濃厚であった。

(3) 経営方法が粗末で、管理手段が原始的である。何千年以来、新疆の牧畜業は基本的に天然草地において、“逐水草而居”と言う遊牧方式を主にとってきた。最終的に“自然に依拠して家畜を飼う”と言う後進的管理方法を守ることになった。自然の影響によって、家畜は四季における生長は必然的に“夏に体力が回復し、秋にふとり、冬にやせ、春によわる”ことになる。生産資料を所有していた少数の牧主は、生産に対して関心がない。ただ遊牧民の剰余労働を搾取するだけであった。これは牧畜生産が大自然にたよって行なわれる傾向を一步強めた。このように、牧畜業の原始的、粗末で、自然にたよって家畜を飼う伝統的経営方式が、社会、自然、歴史と言った多くの原因によって決められている。

(4) 戦争が続き、社会が不安定である。これが新疆牧畜業の発展に大きな影響を与えた。何千年以来、特に清の政府は新疆を支配して以来、新疆はだいたい動乱の中におかれていた。歴史の資料からも分かるように、新疆に戦争の記述がたくさん記載されている。清の時代以前、天山の北と南が相互に交流がないので、南北両地域の内部にも多くの部族、民族、国家があった。それらの間に仲直りが重複し、戦争がやまなかった。乾隆時代には、清の政府が最終的に新疆の統一を実現させたけれども、封建統制者の民族圧迫におかれた。特に近代の外国の侵略において、新疆の情勢は以前として不安定の中であった。戦争が続くことによって、牧畜業生産に大からず少なからず損失を持たらした。遊牧民がつかまえられ、家畜が大量にころされ、大幅に家畜が持っていかれ、服役させられた。正常の生産と生活秩序が破壊された。このように新疆の牧畜業は常に後進で停滞状態におかれて来た。

## 2. 解放後の新疆牧畜経済の基本情況

中国が成立した後、中国の社会主義牧畜経済は、民主主義改革を行なうことを基礎にして、社会主義改革を経て建設、発展されたのである。しかし、解放前の中国は半封建、半植民地的社会であって、農村に封建地主の経済制度が統治地位を占めていた。牧畜地域に封建搾取制度が存在するだけでなく、貴族の封建特権制度が存在していて、ある地域には奴隷制度の残余までこのこっていた。このような後進的生産関係こそ中国の社会が何千年に渡って経済的に、社会生活的に前進しない基本的原因である。また牧畜業生産が長期的に停滞する基本原因ともなる。以上のような古い生産関係をなくさなければ、農業と牧畜業において生産力の解放ができない。

中華人民共和国の設立にともなって、中国牧畜業の社会主義改造に前提条件が作られていた。政府は生産関係が生産力の性格に必ず照応するべきであると言う経済原則にしたがい、これを中国の实际情况と密接に合わせて、農村に土地改革を行なった。牧畜地域に各種の民主改革を行ない、封建特権制と奴隷制度をなくして、草地の公有、放牧の自由を実現させ、貧困をたすけ、生産を発展させる方針をとった。政府のこのような方針によって、牧畜業生産が急に発展と回復を得た。1950年から1954年まで、各種の民主改革を経て、遊牧民の経済条件を高めて、彼らの生産積極性を刺激した。牧畜地域において、政府は保護政策をとった。それは家畜生産を増加させ、家畜を保護することである。それに草地を開発し、狼を組織的に消滅し、家畜の疫病を防ぎ、家畜の冬住みを建設し、冬に使う牧草の貯蔵を行なった。これが牧畜生産の発展にきわめて有利な条件を与えてくれた。これ以外、政府は家畜を保護する、増加するためにローンをくづした。これによって牧畜の発展と回復の速度を早めた。例えば、1949年から1955年までに、アルタイ地区にくづした家畜保護ローンと救済ローンが合計 470万元になったので、生産を発展させるのに役だてた。これと同時に、草原のあらそいをうまく解決した。歴史上、新疆牧畜業において、草地のあらそいは重大の問題であった。以前、歴史的原因から、民族の間、部族の間また遊牧民の間に常に草地のあらそいが起っていた。家畜の多い所に草地が不足すれば、家畜の少ない所に草地が余って十分に利用できなかった。政府は牧畜生産と民族団結のために、自治区を始め、県等に各級の“草地管理委員会”を設置し、解決方法を提出した。したがって、長期に渡って残った草地所有の不公平状況を調整し、草地におけるあらそいを次第に

解決した。このように、牧畜地域に民主改革が行なわれ、牧畜生産が発展されて行った。1949年から1955年までの間に、全新疆の家畜頭数は1640万700頭まで増えた。1949年に比べると、57.9%増加していた。

しかし、民主改革以後、農村または牧畜区は依然として分散的で、個人所有経済の形態であった。このような経済形態には次のような局限性があった。すなわち、資金の蓄積ができなかった。生産に対しての科学技術の応用ができなかった。自然災害に対する抵抗力もなかった。それに貧富の差が大きくなる一方であった。特に分散的で、個人所有の遊牧経済はよわくて、不安定性がおおきかった。それは依然として自然的あるいは半自給的な小規模商品経済なので、社会主義工業化と全国民の畜産品に対する需要を満足させるのに極めて重要な矛盾が存在していた。したがって、政府は牧畜業に社会主義改造を行なう任務を提出し、これは社会主義牧畜業を建設する唯一の正しい道と指摘した。

牧畜業の社会主義改造を行なう中で、政府は新疆牧畜地域の特殊な状況から出発した。それは社会経済の構成、民族、宗教および牧畜業の経済的メリットである。これを根拠に牧畜業の社会主義改造の路線を規定した。平和的方式をとり、労働者と遊牧民にたよる。それから団結すべきあらゆる人と団結し、安定的に牧畜生産を発展させることを基礎において、次第に牧畜業の社会主義改造を実現させることである。そして新しい社会主義的牧畜経済を設立する。以上に規定した方針以外に“政策を安定させる、方法は色々である、時間を長くおく”と言う経営原則を提出した。牧畜業における社会主義改造の内容はと主に二大部分に分けられる。それは労働者と遊牧民に対する個人経済の改造と牧民経済の改造である。

牧畜地域における労働者と遊牧民の個人経済の社会主義改造は、個人の意思によって互いに利益を見合うようあるいは国から補助する原則である。互助組と合作社を互いに結合させながら、次第に前へ進む方法をとった。民主改革において、すでに草地の公有を実現させてあるから、遊牧民の合作社に入社する時、主に家畜入社の問題を解決することだけである。家畜は生きている動物であり、生産資料であれば、生活資料でもある。自然にたよって家畜生産を行なう時、ちょっと気が付かないと、損失をこうむりやすくなる。牧畜生産のこの特徴を基礎において、家畜の入社において完全に遊牧民の意思によって、地元の状況にあわせ、多種多様の方法をとった。例えば：(1)生む年齢の雌の家畜を頭数によって入社させ、労働力と家畜を株として入社させ、この株の比例によって、当年度に繁殖された小家畜と畜産品が個人に分配される。(2)家畜を入社させる時、価格を株で計算し、その比率によって利益を分配する。(3)家畜が株で計算され入社する時、家畜株に固定利息をつけて支払する。それから労働者は労働量によって収入を得る。(4)家畜が価格で計算され入社する時、全額を分割して支払する。どれの方法をとっても、完全に遊牧民の意思によって、地元の状況に合わせる方針である。それに社員が自分にも必要な家畜をのこすことが許される。

牧民に対する改造は、遊牧民の個人経済の改造が成果を得て、牧畜地域の合作化運動がかなり発展され、それに牧民経済がもっと発展されて行く中で労働力が不足になり、雇用が困難である状況があらわれて、1956年から始まっていた。当時の牧民人口は全人口の約1割を占め、家畜頭数はその10%を占めた。政府は、彼らに対して、平和的に買いもどす政策をとった。主に公私合営牧場を設置し、彼らを合作社に入

社させる形式である。それに牧主の自由意思による。政治的に、彼らとたえまなく団結し、仕事と生活にできとうに按分してあげる政策を実行した。かくて、大部分の牧主がかなり順調に社会主義改造を受けた。また彼らを自分で自給自食できる労働者にならわせた。

農業地域あるいは半農半牧畜地域の牧畜業が農業の中に占める比率は大きくないけれども、これらの地域における家畜の数は少なくない。大部分の農耕用家畜、または豚と家畜の全部が農業地域あるいは半農半牧畜地域において飼われている。農村の社会主義改造の中で、これらの家畜に対してそれぞれ違った政策をとった。農耕用の家畜は農業生産の基本の生産資料であるから、一般的に価格で計算して農業合作社に入社させ、分割払いの方法を実行した。牛または羊と言った家畜に多種多様な方法をとった。(1)家畜は価格を株で計算し入社させ、比率によって利益を分配する。(2)家畜は数によって入社させ、合作者と牧主の間に、比率によって、小家畜と畜産品を分配する。(3)家畜を価格で計算し、分割払いすることである。どれの方法をとっても、社員に必要な家畜をのこして、それを発展させるようにはげんだ。

とにかく、牧畜業における個人経済の社会主義改造の実験点が1952年に始まった。先に牧畜地域に臨時的にまたは季節的に互助組を実験した。1954年から長期的な互助組を実験した。1955年の春からウルムチで三つの牧業生産合作社を実験した。このように、点から全地域まで、実験から普及させるようにして、良い経験を集めた。1956年から牧畜業の全般的な合作化過程が始まった。1956年の春、全新疆において、100をこえる牧畜業者を組織し、4000をこえる牧民家族を入社させた。同時に、農業合作社に入社したそれを合せて18,000戸になる。全戸数

の45.3%を占める。それから互助組が6000まで増えて、加入した遊牧民が46,000戸となり、全戸数の38.61%となった。合作社と互助組に加入した遊牧民の戸数は全戸数の53.64%であった。牧畜業合作社は、牧場の移動、飼養管理、自然災害をさける、良い品種の普及、農業と牧畜業を結合する、兼業経営と生産を発展させる面において、互助組より良いメリットを見せてくれた。例えば、牧畜業社は冬に使う草の貯蔵量は互助組より倍ぐらい多い。管理方法を改善させてから、合作社には、羊の二子率が普段より10%から15%まで高くなった。二代から三代の雑種羊の比率も互助組より14%ぐらい高い。兼業収入も、互助組のそれより10%ぐらいのびた。それに合作社は飼料基地を拡大して、草地を計画し、次第に遊牧民を定住させた。これが遊牧民の移動から起こる家庭生活の不便を解除し、かつ牧畜地域の政治、経済または文化の発展を早めた。

以上によれば、政府は各地域の具体的な情況と牧畜経済の特点を基礎において、地元または家畜の便利に合わせてあらゆる改造方針と政策をとった。農業は1956年、牧畜地域は1958年において、それぞれ社会主義改造をなしとげて、全面的な合作を実現させた。全改造家庭において、ソ連または東ヨーロッパの国に表われた大量に家畜を屠殺することをさけて、牧畜業の発展を有力に動かした。これと同時に、政府は牧主経済に対する社会主義改造に平和的方法をとって、牧主が好意を持って、公私合営牧場を組織することを實現させた。1958年の春において、公私合営牧場を建立することは完成した。1958年春に、全新疆において1716の牧畜業合作社が設立され、154の公私合営牧場が建立された。入社入場した牧民は8万戸余りで、農業地区におけるそれを合わせると9万戸余りになって、

全新疆の牧民戸数の82%となった。全新疆の入社、入場した家畜と国有家畜を合わせて1550万頭で、全新疆のその88%であった。

新疆に民主改革と社会主義改造が行なわれると同時に、政府は牧畜業の全民所有制度の建立と発展を非常に重視した。全民所有制度は社会主義牧畜業の主導部分であり、牧畜業発展の行き先を代表している。1950年新疆に五つの地方国营牧場を建立した。1959年において46まで発展した。1950年に比べると8倍まで増えた。1950年に、地方国营牧場の各種家畜頭数は3万余りで、1959年まで72万頭まで増えて、1950年の20倍となった。公私合営牧場の各種家畜280万頭を加えると約360万頭で、全新疆の19%であった。地方国营牧場は家畜の数を増加させる面において、成績を上げるだけでなく、家畜の質と新しい品種の改良の面にも成績を上げた。数多くの牧場が国の良種家畜の基地となり、毎年区外に数多くの良種家畜を輸出して、全国の牧畜業生産の発展に力を尽くした。また、区内の別の牧畜業の発展の教材またはリーダーとなった。

合作化を実現させて後、生産関係が必ず生産力の性格に照応しなければならないという原則にしたがって、生産関係を十分に安定させかつそのメリットを發揮させて、力を集中し、生産を發展させるべきだった。残念なことに、調査研究は不足で、頭を冷やすことができなくて、以上の原則に背をむけてしまった。農業合作社が経て一年たらずで、牧畜地域の合作化が終わったばかりの時、そのメリットを十分に發揮させ、發展家庭においての問題が表われ、生産力の發展が一步と進んでいない内に生産関係の改革を行なってしまった。1958年何ヶ月の間に人民公社化を実現させた。そうすると、牧畜業改造の中で得た経験をなくした。それに、公社化の初

期、大集団に生活するとか、“共産風”とか全国に広げられ、みんなに同じ分配をする、財産を調整すると言った不合理的な經營方式が表われた。それから、商品經濟または等価交換、価値原則と労働量によって分配すると言った經營原則を否定した。これによって労働者の生産に対する積極性をいため、農業と牧畜業の生産力を破壊した。農業と牧畜業の生産が急に下落し、彼らの生活もある程度で困難に落してしまった。新疆の牧畜業生産水準が1952年の水準にもどってきて、公社化の運動によって大きな損失をこうむった。その後、このことが政府の注意を起こさせた。したがって、政府は國民經濟あるいは農村と牧区の生産関係に対して、あらゆる調整を行なった。1961年の年末に、政府は基本的な利益計算権を生産隊までおろすことを決定し、1962年にまた《人民公社工作条例》(草案)を發表して、農村と牧区に対しての“三段階において所有をさせ、小隊を基礎とした段階別利益計算、等価交換、労働量によって分配する”制度を明かに規定した。このことによって生産関係が基本的に安定され、農業と牧畜業の生産が發展と回復を見せた。したがって、新疆の家畜頭数が1955年1,646万から1965年の2,697万と發展された。

しかし、このような調整が人民公社の中に起きている問題を根本から改善させることができなかった。この時、特に合作化の過程において作られた各種形式の生産責任制と労働ノルマ管理などが基本上否定されていた。それに、集団労働、利益の統一計算、統一分配と言った管理方法は農村と牧区の具体的な情況に合わないから、依然として農民と牧民の生産積極性をおさえていた。この原因から生産の發展速度が遅れて、農民と牧民の生活に特に改善が見られなかった。それから中国では66年から1976年まで

“文化大革命”が起きて、ふたたび生産の破壊が起きていた。したがって牧畜業も国民経済の別の部門と同じように停滞状態におかれていた。

### 3. 新疆牧畜業の近年の発展情況

10年間の“文化大革命”が終ってから、特に中国共産党第11回中央委員会第3次全体会議以後、新疆の牧畜業生産は国民経済の各部門と同じように安定的な発展軌道にのせられた。これ以前の28年間において新疆牧畜業の発展は曲り路をあゆみながら、何回ものショックを受けた。近年の10年改革を経て、新疆牧畜業生産の発展が有力に進められた。1978年に比べると、1987

年には、全新疆の年末の家畜頭数は29.9%増加され、10年間に家畜の商品量と自食量は121.9%まで増加されていた、社会に対する商品化された家畜頭数は166.6%までのび、肉類産品は131.9%のびた。羊毛は52.5%、牛乳は194.2%、たまごは170.4%のびた。1980年の不変価格で計算すれば、牧畜業の総生産価値は104.4%増加した。1988年において新疆の各種家畜頭数は1978年の2476万9800頭から増えて3275万頭になった。このうち、羊は約70%を占めるので、新疆の羊の生産は比較的発展している。その具体的な発展状況は次の表に示めされている通りであった。

近年の全新疆の羊生産の状況

単位：万頭

年	1976	1978	1980	1982	1984	1986	1988
項目							
羊の総頭数	1562.82	1577.54	1716.54	1920.58	2023.64	2119.70	2278.22
そのうち： 細毛羊の頭数	576.45	659.81	785.77	917.85	987.03	1017.80	1151.01
(%) 細毛羊の比率	36.9	41.8	45.8	48.8	48.8	48	50.5

表から分かるように、新疆牧畜業における羊生産は重要な地位を占めている。それは数の増加だけでなく、質の面でも高い水準まで行っている。例えば細毛羊の比率は1976年の36.9%から1988年の50.5%まで増加した。10年の改革以来、新疆の各種家畜の頭数は比較的大幅に増えている。すなわち1978年の2476.98万頭から1988年の3025.58万頭までと増えていて、年平均100万頭の発展速度で、歴史になかったことである。とにかくこの10年以來、牧畜業生産状態は一般的に良いのである。これは各種生産指標から表わせるだけではなく、質からも見る

ことができる。例えば1976年新疆の肉の生産は9.65万トンで、1988年に24.5万トンとなった。

新疆牧畜業の発展には、特に草原牧畜業の発展には独特の自然資源条件がととのえられている。新疆の草地の総面積は8000万ヘクタールで、全国のその50%である。その中に可利用草地面積は5040ヘクタールで、全国のその22.8%である。全新疆の一人当りの草地面積は4ヘクタールで、全国のその11.3倍であり、全世界の5.5倍である。全国に比べれば内モンゴル自治区の次に入って、全国で2番目である。草地の形は多種で、全国で1番目であり、ある上等

草地は世界で余り見られない程である。新疆の天然草地は三つの種類に分けられる。すなわち、放牧草地、草を刈る草地と両方の兼用草地である。

しかし、天然草地の利用において、地形と気温などの自然的制限から季節的に利用する特徴を有している。冬草地が不足する問題は新疆天然草地における重大の問題である。面積と家畜可飼養量の分配から見れば、夏草地と夏秋草地は1667万ヘクタールで、全草地の33%を占め、家畜可飼養量は5465万羊単位であるが、草地利用期間は3ヶ月たらずである。冬草地と冬春草地は1500万ヘクタールで、全草地の29%であり、家畜可飼養量は、3000万羊単位であり、利用期間は4ヶ月以上である。春、秋草地は約1400万ヘクタールで家畜可飼養量は2892万羊単位だけで、利用期間は4ヶ月から5ヶ月までである。新疆の天然草地の利用に季節的特徴があること以外に、草地水分の分布も不合理である。人と家畜に水を供給する問題は草地利用において解決しなければならないことである。この問題から、ある草地に草があっても水がないので、利用できない。全新疆の水の不足する草地は1667万ヘクタールで、全草地の有効利用面積の1/3である。したがって、水のある草地に放牧しすぎて、水のない草地に放牧が十分にできない。当然のことながら、今の状況では天然草地の牧草の生長に必要な水分は天然降水量に依存しなければならない。このように気候条件の変化の影響を受け、年度間における草地の産草量はとても不安定である。これが草原牧畜生産の不安定を起こさせる。この上に新疆の草地は30年来的破壊も残酷である。虫またはねずみの草地に対する破壊のほか、人工的な破壊もかなり大きい。統計によれば、30年間に、全新疆の開墾された冬春草地と採草地は330万ヘクタールを

こえる。可利用草地面積の7%以上を占める。上述の人工的または自然的な破壊は、新疆の季節における草地面積のバランスがくずれる矛盾を一步重くさせ、牧畜業の発展に対する影響が大きい。何と云っても、新疆では天然草地の自然資源自体は草原牧畜業を発展させる主な物質的基礎である。したがって、草原牧畜業において、草地の合理的利用を実現させ、草地の保護と建設または草地の生産性を高めなければならない。そして、次第に草地と家畜のバランスを実現させ、良い生態システムを維持させることである。それと同時に基盤建設を強め、生産条件を改善させることである。新疆の牧畜業は生産条件の後進的原因から、自然災害を防ぐ能力が弱いので、自然にたよって家畜を飼う条件におかれている。自然災害の程度によって生産量が左右され、降水量の大きさによって生産力が高まることになっている。このような自然状況によって左右されることから解放されるために、基盤設備の設置を強め、生産条件を改善させなければならない。これが新疆の牧畜業が継続的にかつ安定的に発展とげる基本点である。ここでの基本的な問題は草地の基本建設のほか、水利建設を強めなければならない。なぜならば、水利建設自体が草地建設の核心であり、水があってこそ草があり、それから家畜がある。水利は牧畜業の命でもある。このほかに家畜舎の建設である。畜舎があれば家畜が安全に冬と春をたえていくし、草原牧畜業の発展に良い基盤をあたえてくれる。

人類の歴史から見れば、昔の牧畜業は、人間が野生動物を訓練することから形成されていた。当時の社会生産力が低くて、訓練された家畜の数も品種も少なかった。それに人間の住んでいる所のまわりにおいて、家畜を飼う飼料と草は完全に解決できていた。これが牧畜業の初期の

経営方式は家庭が定住して家畜を飼うことであった。社会生産力の発展につれて、家畜の数と種類が増えて行く中で、家畜に必要とされる飼料と草は大量に増えて行き、定住しながら家畜を飼うことができなくなった。したがって生産の発展を満足させるために、新しい経営方式が表われた。それが、“逐水草而居”と言う遊牧方式である。遊牧経営方式は原始的定住経営方式の否定と発展である。“逐水草而居”と言う経営方式は伝統的な古い経営方式であるが、各種地形の天然草地を十分に利用し、自然資源のメリットを発揮させる面ではかなり良い方法である。そうでありながら、これが一種の自然に左右される後進的経営方式であるから、かならずこのような伝統的古い経営方式をあらためて、遊牧民を完全定住か半定住させるようにしなければならない。なぜならば、それは何千年来遊牧民が水と草によって放牧を行い、季節によって移動する原始的生産と生産方式をあらためるの一つの革命である。それに牧畜業の発展を早め、牧民の経済を振興させる一つの戦略である。定住してからこそ草を植える面積を拡大して、生産基盤を建設することができ、科学的に家畜を飼いま管理して兼営を発展させられる。それに、文化、教育と衛生を発展させ、遊牧民の素質を高めて、生産と生活の便利をはかることができる。定住こそ牧畜業の近代化の道であると言える。したがって、新疆自治区政府は、草原牧畜業の定住問題は牧畜業の古い状態を改善させる重大の問題と見ている。草原牧畜業が遊牧経営方式から定住または半定住になるのが生産発展の必然的結果である。定住または半定住は新疆草原牧畜業を発展させるための有利条件となる。

新疆牧畜業生産を発展させるための有利条件は以上に述べた条件のほかに優良な家畜品種資

源もその一つである。新疆の各民族は長期生産実践の中で、豊富の生産経験を集めていて、数多くの家畜種類をそなえている。歴史上、新疆は中国の牧畜の放牧が非常に発達した地域と見られている。牛、羊、馬等は新疆の主な家畜であり、広い草原がこれらの家畜の生活場所である。多くの人々が分っているように、新疆は中国では面積の一番大きい地域であり、中国面積の1/6である。全新疆の土地面積の中で、山は27.5%、丘は21.8%、平原は28%、砂漠は22.4%、水面は0.3%を占める。これから分るように、新疆では各地域の自然条件と社会経済条件に差異がある。これは必然的に家畜の各地域における自然分布状態を決定している。

牛、羊、馬は新疆の特産である。各種家畜の中で、羊の比率は1番大きい、山羊は2番目で、牛はその次となっている。新疆だけで、羊は全国の20.3%、山羊は6.4%、馬は9.5%である。とにかく、新疆の家畜資源は極めて豊富である。家畜の数だけではなく、種類が多くて、分布も広い、品種も良いことで、中国の主な家畜種類の基地となっている。ある優良品種は新疆牧畜業経済の中で重要な地位を占めるだけでなく、全国にそれの中にも大きい影響をあたえている。これらの貴重な家畜資源は新疆牧畜業の近代化を実現させるための基礎ともなる。

新疆牧畜業生産の発展において、多方面の有利な条件があるけれども、牧畜業発展の中で存在している問題点は少なくない。例えば、牧畜業における科学技術の普及、牧区の兼営（兼業）問題、牧区の教育、衛生と交通運送、牧畜業の管理体制等における問題点は数多く存在している。それらを研究またはさぐるべきである。本文において、牧畜業の中で存在している数多くの問題点についてふれないことにした。